

映像に表れた大阪像

—授業実践報告Ⅱ—

芝田 江梨

大阪を舞台とする映像作品でしばしばみられるのは類型化された大阪の描写である。この傾向は大阪のみならずそこで暮らす人々のキャラクター設定にもあてはまる。こうした大阪の表象は映像作品だけではなく様々なマスメディアにおいて汎用されているが、例えば過去、現在の映像作品を比較すると時代の変遷に伴う差異のあることがみえてくる。

今回の講義は現代から過去へと映像作品を辿りながら、そこでの「大阪」像、「大阪人」像の描写に焦点をあてるものであるが、筆者は一連の講義の中で戦前期を担当した。この時期が重要な理由は、当時の大阪が近年の映像作品にみられる大阪像とは異なる顔を持っているからである。現代のステレオタイプ的な「大阪」像とは異なる大阪の側面を発見すべく、モダン文化の発信地として知られた当時の大阪の状況について俯瞰し、関連する映像作品を2作取り上げたが、このレポートではその概略について述べたい。なお第12回講義終了後に「もし自分が大阪市長になったら」というテーマでミニレポートを受講者に提出してもらったが、都市計画や文化事業のアイデアのみならず大阪に対するイメージにどのようなものがあるかが提示されており、非常に興味深かった。

1. 第10回「戦前の大阪における映画・演劇興行」

この回では1937（昭和12）年に大阪市電気局（現大阪交通局）と産業部が制作した観光映画『大大阪観光』を鑑賞し、「大大阪」と称された戦前の大阪やそこで展開された舞台公演を中心とする文化活動について振り返った。

大正末から昭和初期は大阪が近代都市として著しい発展を遂げた時期である。「大大阪」という名称は大阪市が1925（大正14）年の第二次市域拡

張で日本第一位の座に輝いた躍進に端を発する。大大阪の「大」は拡大の意味を表すだけでなく、日本有数の偉大な大都市へと成長を遂げようとする大阪の意気込み、未来への展望をも示唆していた。日本の中枢は1923（大正12）年の関東大震災が起こった後も依然として首都東京であったが、大阪は当時の基幹産業である繊維産業の中心地であり、突出した工業生産額を誇る工業都市として存在感を放っていた。「大大阪」繁栄の原動力はそうした経済力にあったともいえる。

表1 6大都市の比較(大正14年)

区分	人口	面積	人口密度
	人	km ²	人/km ²
大阪市	2,114,804	181.7	11,639
東京市	1,995,567	81.2	24,576
名古屋市	768,558	148.1	5,189
京都市	679,963	59.9	11,352
神戸市	644,212	62.6	10,291
横浜市	405,888	37.0	10,970

備考：人口は大正14年10月1日の国勢調査結果、面積は各市の統計書による。ただし、京都市の面積は大正14年1月現在、他市は同年末現在の数字である。

図1¹

講義内で取り上げた『大大阪観光』にも当時開通したばかりの地下鉄御堂筋線や御堂筋、堺筋の様子、沿道に立ち並ぶ西洋風の建築、稼動し続ける工業地帯が映し出されており、「大大阪」のモダンさ、賑わいが描き出されている。

『大大阪観光』は観光映画という性質上「大大阪」時代の大阪の明るい側面に焦点をあてているが、その最たるものとして挙げられるのはこの地におけるモダン文化の隆盛であろう。美術や音楽等といった多岐に渡る分野において、明治維新以前より培われた伝統と西洋のエッセンスが溶け合った新たな文化が萌芽し、積極的に発信された。今回の講義ではその一端として大阪の興行に焦点をあてた。山口廣一は「明治以降の大阪劇壇」において大正年間の大阪の興行状況を以下のように振り返っている。

大正期に入っての道頓堀では、山崎長之輔一座につづく「新国劇」の創成。喜劇畑では曾我廻家五郎一座の確立。松竹系以外では小林一三による宝塚少女歌劇団の誕生など、多くの新しい演劇運動や劇団運動が、むしろ東京よりも大阪で、より健全な育成を見ている。新しい演劇活動はおおむね大阪を温床としていた観があった。²

大阪の興行の中心地道頓堀では、江戸時代からの伝統をもつ朝日座、角座、中座、浪花座、弁天座の五座において歌舞伎や人形浄瑠璃等の古典芸能が観客の目を楽しませていたが、その一方で山口が指摘しているように新しい演劇、演芸（加えて映画）も公演され、宝塚少女歌劇に代表される新たな芸能をも育てていた。講義では大阪の文化創造力を明示する例として大阪の興行状況にふれたが、大阪の文化水準を考える上で文化施設「大阪朝日会館」にも言及した。1926（大正15）年から1962（昭和37）年にかけてこの施設ではクラシック音楽や長唄等の邦楽、バレエ、モダンダンスの公演、能、日本舞踊の公演、チェコ映画を始めとする芸術的なヨーロッパ映画の上映といった多彩な催し物が行われている。また年末の「同情週間」や義捐金目的の興行といった社会貢献を視野に入れた文化事業も盛んであり、「アサヒ・コドモ・アテネ」と称する子供を対象とした情操教育にも着手していた。

以上の内容を踏まえ、第10回講義のまとめとして大大阪時代の大阪の近代化や大阪の文化創造力について述べ、同時代の大阪がモダンな文化の発信地であり、大阪朝日会館での公演内容が示すように高い水準の文化事業が大阪で進められていたこと、またそれを享受しうる成熟した鑑賞能力を持つ観客層のあったことを講じた。

2. 第11回「戦前のおおむね大阪における映画製作—情報の発信地・大阪—」

この回では日本映画史の草創期を振り返りつつ、戦前のおおむね大阪での映画製作に焦点をあてた。具体例として大阪の映画製作会社「帝国キネマ演芸株

式会社」を挙げ、同会社が1929（昭和4）年に製作した代表作の一つ映画『何が彼女をそうさせたか』を鑑賞した。

1896（明治29）年にトーマス・エジソン（Thomas Alva Edison）が発明した映写機キネトスコープ（Kinetoscope）が神戸で紹介されたのを皮切りに様々な映写機やそれらの装置用の短い映像作品が日本に輸入され、映画（当時は活動写真、あるいは「活動」と称された）は日本に浸透していった。ちなみに大阪は日本初の有料映画上映を行ったことから日本映画興行誕生の地とされており³、映画と深い縁を持つ。授業内ではそれに関連して大阪では日本で二番目に映画専門常設館が誕生したこと等、映画にまつわる大阪や大阪人のエピソードをいくつか紹介した。

日本における映画や映画産業の発展について俯瞰した後、映画製作会社「帝国キネマ演芸株式会社」について講じた。「帝国キネマ演芸株式会社」、略して帝キネのあらまは以下の通りである。同社は1920（大正9）年に山川吉太郎という人物により設立された。山川は元々「天然色活動写真株式会社」（天活）⁴という映画製作会社の大阪支店を担当していたが、同会社が買収されるにあたり独立を決意したのである。その後は大阪市内に本社を置き、現在の東大阪市内にある撮影所で時代劇、メロドラマを中心とした大衆に馴染み深い内容の映画作品を精力的に製作していた。帝キネは創立より5年後の1925（大正14）年、自社作品『籠の鳥』の大ヒットで莫大な収益を手にし、その利益をもとに他の映画製作会社からスタッフや俳優を引き抜いていった。これは会社の規模拡大を狙ってのことであり、躍進を図る意図は、1928（昭和3）年に完成させた巨大な映画撮影所「長瀬撮影所」の存在に顕著に現われている。ただしこの時期の事業拡張は無理を伴うものであり、世界恐慌に伴う不況等の影響から、1929年以降帝キネは松竹と提携して映画製作を行うようになる。授業内で鑑賞した『何が彼女をそうさせたか』はこの時期長瀬で撮影された作品であり、「傾向映画」⁵の代表作ともされるその作風は従来の帝キネの路線とは異なるものであった。1930（昭和5）年には長瀬撮影所が火事により消失し、京都太秦の松竹太秦撮影所を借りて製作を続行するも帝キネの経営状況は改善

されなかった。最終的に松竹の資本を得た帝キネの代行会社「新興キネマ株式会社」が発足し、帝キネは姿を消すこととなる。

今回の講義では大阪が情報や文化を発信していた例として大阪の映画製作を挙げたが、帝キネの活動を特に取り上げたのは大阪に拠点を置きつつ全国に自社の作品を盛んに供給していたからである。特に関東大震災で東京の映画撮影所が中断した折の活躍は目覚ましいものであった。従って授業の終わりでは大阪と大阪人が日本の映画草創期において果たした役割について再度言及した後、帝キネが量産した作品内容、関東大震災後の活動を鑑みて、同社が大衆に馴染みのある題材を中心に大阪から全国に娯楽を発信していたとまとめた。

3. 第12回「大大阪時代—モダン都市大阪の全体像」

この回では第10、11回の内容を振り返りつつ、第10回講義で鑑賞した映画『大大阪観光』を再度取り上げた。これまでは近代都市としての躍進やモダン文化の隆盛といった大大阪の光の部分にばかり焦点をあてていたが、第12回では『大大阪観光』を通して陰の部分にも目を向けようとした。

『大大阪観光』は大阪をアピールする目的で制作されており、作品の中ではモダンな大阪、産業都市としての大阪を印象付ける映像が盛り込まれている。しかしながら同作品は図らずも「大大阪」が抱えていた諸問題を示唆している。例えば作品内で映し出される工場の煤煙は本来産業振興をアピールするものであるが、大量の煤煙が空气中に放出されている様子は環境汚染の可能性を明示している。実際この時期大阪では産業の発展を急ぐあまり深刻な空気汚染が引き起こされていた。行政による対策が進められたものの、問題を解決するには至らず大阪には「ホワイトシティ」、あるいは「白色都市」という不名誉な名称すら冠せられている。

「煙の都大阪が『白色都市』になる—近く煤煙防止令が布かれ煙突の煙り退治」

世界一の煙都大阪の空を蔽う煤煙排出量は、一箇年五百三十^トとん、日

照を遮り、紫外線を封じ、都市緑化を妨げ、乳幼児の死亡率を高めるので、この煤煙駆逐のため大阪市では煤煙防止協会が作られ大阪府では完全燃焼機関の施設普及の為、汽缶取締規則等を立案し、折角空中浄化につとめ、目下府市後援で大阪都市協会主催の下に空中浄化週間が行われている。⁶

映画の中には描かれてはいないものの「大大阪」時代の大阪は環境汚染以外にも近代化、工業化が著しい都市に共通の諸問題に直面していた。産業発展を優先するあまり、インフラ整備や都市社会問題への対策が追いつかず、住宅問題や環境問題といった都市問題が深刻化していたのだ。同時代に進行していた経済の世界的な悪化、軍事体制へと移行する時局の変化が影響を及ぼしそれらの諸問題は解決されるには至らなかった。

戦前の大阪は日本の産業を担う近代都市として躍進し、市域・人口とも急速に膨脹し、そこで形成されたモダンな都市文化は全国に波及していた。『大大阪観光』が描き出そうとする大阪像はこの事実と合致する。しかし煤煙が示すように『大大阪観光』には描かれなかった都市の暗部が見え隠れしている。従って講義のまとめとして、大大阪時代の大阪は日本有数の大都市、文化の発信地として東京に負けない存在感を放つ一方で産業振興を優先するあまり成長著しい近代都市特有の諸問題を内在させていたと講じた。

注

- 1 新修大阪市史編纂委員会（編）『新修大阪市史第七巻』、大阪市、1994年、4頁。
- 2 山口廣一「明治以降の大阪劇壇」『大阪の芸能』株式会社毎日放送、1973年、105-108頁。
- 3 1897（明治24）年2月15日、大阪のミナミにある南地演舞場でリュミエール兄弟、オーギュスト・リュミエール（Auguste Marie Louis Lumière）とルイ・リュミエール（Louis Jean Lumière）が手がけた映写装置シネマトグラフ（cinématographe）の有料上映が行われた。

- 4 1914（大正3）年に日本で創立された映画製作会社。
- 5 1920年代末の世界的な大不況を背景に階級社会の矛盾、貧困を糾弾するプロレタリア映画の作品群。
- 6 『大阪時事新報』1931年10月17日。